

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.377

2017

11

隔月刊



世界最高峰のソーラーカーレースに参戦する新型車両
「2017年型 Tokai Challenger」の試走の様子（東海大学）

特集 薬学教育のいま

座談会 全員留学に期待する効果と注意点

小特集 外国人留学生への就職支援

明日への試み 東邦大学

わが大学史の一場面 梅花女子大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 駒澤大学／久留米大学／東京情報大学

クロースアップ・インタビュー

株式会社花満 相談役 兼 企画広報室長 和田由里さん

日本私立大学連盟



バリアフリー推進室の活動



新入生の相談にこたえる上級生





大学点描

次の、世界標準へ。

本学は建学以来、「文理融合」の教育理念のもと
世界平和に貢献し、科学技術立国を担える人材育成を
その使命として掲げてまいりました。

2017年に建学75周年の節目を迎えるにあたり
これからのグローバル時代を牽引する人材を育成し
世界にその存在感を示すことのできる大学を目指しています。

次の、世界標準へ。

私たちの新しい挑戦が始まります。



東海大学



教育・研究

全国8キャンパスで人文科学・社会科学・自然科学の幅広い学問領域で教育を展開している東海大学。「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力の育成を教育目標に掲げ、研究面においても、イノベーションの創出に大きく貢献する「研究の峰」を形成し全学で取り組んでいます。





地域連携・国際連携

地方自治体との協定の締結、大学 COC 事業の採択を受けての地域連動型教育の実施など、地域との密な連携を実施している東海大学。国際交流の面でも、海外 40 ヶ国・地域の 131 機関と国際交流協定を締結し、学術面から文化、スポーツまで幅広い分野で連携を深めています。





学校法人東海大学 2017 年 建学 75 周年

創立者松前重義が教育による国づくりを志し
本学園を創立したのは 1942 年。
今年で、建学 75 周年を迎えました。

明日の歴史を担う強い使命感と
豊かな人間性をもった人材を育てることにより
調和のとれた文明社会を建設する

学校法人東海大学は
創立者が教育に託したこの情熱と理想を胸に
確固たる総合教育研究機関として
建学 100 周年に向けて邁進していきます。



大学時報

No.377

2017.11



世界に存在感を示せる 大学を目指して

山田 清志 ● 東海大学学長

東海大学は今年、建学75周年を迎える。創立者の松前重義は、「人文科学と自然科学の融合による確固たる歴史観、国家観、世界観を把握せしめる」ことを教育理念として掲げ、今日に至るまで、幅広い視野を持って人生の基盤となる思想を培うことの重要性を学生に説き続けている。

社会から大学教育への期待が多様化しているいま、グローバル時代を牽引する世界標準の人材を育成し、世界に存在感を示すことができる大学を目指し、全学を挙げて邁進したい。

大学時代を充実させる二つのステップ

堺 憲一 ● 東京経済大学学長

はじめに

大学ではいま、学生たちが主体的に考え、動く力を育成するための方法として、アクティブラーニングを導入する動きが活発になっている。主体的、双方向的、問題解決型の授業が効果を発揮するためには、教員にもさまざまな工夫が求められることは言うまでもない。しかし、教員が学生の主体的な意見や活動を引き出そうとしても、手応えがあまりない学生もけつして少なくない。なぜなら、大学入学以前に、自分の意見を主張したり、アイデアを出したり、あるいはグループで何かを企画・実践する機会が多いとは言えないからである。

学生からすると、主体的にと言われても、何をどのようにやっていけばよいのか分からないといった

答えが返ってきそうである。そもそも、学生が抱える悩みの中で、主体的に取り組めないという問題は必ずしも十分に意識されてはいない。もつと多様で本質的な問題に埋没してしまっている。多くの若者に共通している悩みといえば、「自信が持てない」「自分には力がない」「やる気が起きない」「目標が見つからない」などである。ところが、それらの悩みを個別に考えてしまうと、解決策が見つかりにくくなる。「主体性が持てない」という悩みは、「自信」「能力」「やる気」「目標」といった、より根本的な悩み事と相互に関連し合っているからである。端的に言えば、「主体性が持てない」「目標が持てない」「やる気が起きない」のは、「自信が持てない」「能力がないと感じている」ことと表裏一体の関係にあるように思う。

では、そうした現状をどのように打破していけばよいのか。一連の悩みの根底にあるのが「能力」の問題だとすると、能力観を変えてみてはどうか。また、能力観を変える中で、「自信」や「やる気」を生み出せないのか。私の考えはそこにある。以下では、「能力」を一般的に想定されているものとは少し違った角度から考える中で、私自身のこれまでの教育実践をベースに、学生が有意義な学生生活を行うためになすべきことを、三つのステップを踏んで提示したい。その点の理解が、教員にとっても有益な視点の確立につながると思うからである。

1 ファースト・ステップへ初期設定する

学生が有意義な学生生活、さらには有意義な人生を送るためのファースト・ステップは、初期設定である。私自身は、スマートフォンやパソコンに初期設定が不可欠であるように、人間にも「こころの初期設定」が必要であると考えている。初期設定の中心は、「人は皆、豊かな能力Ⅱすごい力を持っている」という事実を認識することに尽きる。人はよく「頭が良い人」「頭が悪い人」と言いがちであるが、

本来、そのような区別はないと考えるべきである。

能力とは、読んで字のごとく「何々ができる」ということを意味している。理解力、創造力、行動力、適応力、集中力、忍耐力、決断力など、いろいろな力が含まれている。一言で述べると、「社会で生きていく力」と考えることができる。したがって、もし自分の能力を、生まれてから経験してきたことだけで、より端的に言えば、小・中・高といった学校における学びや成績だけで測ってきたとすると、それは間違いだ。

考えてみてほしい。人間は、生きていくためにさまざまな力を発揮している。「呼吸する」「食べる」「歩く」から始まり、さらに「見る」「聞く」「話す」「書く」「考える」という力などがある。

「生きていく力」の原点は、そうしたごく普通の、誰もが持っている力なのである。この日常的な行為・力は、あまりにも当たり前なこととして受けとめられ、多くの人はその大切さをほとんど意識していない。しかし、それらの意味をもっと意識してみてはどうか。この「生きていく力」を再確認する過程で、自分の中に「豊かな能力と可能性」が備わっている

ことを確認することが、初期設定の内容である。ゲームをする前からあきらめてしまつては、勝てるゲームも落としてしまう。なぜならば、「生きていく力」の大切さを意識することの延長線上に、「生きていく力」をパワーアップするための秘訣があるからだ。

「生きていく力」を演出しているのは、遺伝子と脳と身体である。人間の身体は、およそ60兆の細胞から成り立っている。このミクロの世界は、巨大な都市にも匹敵する壮大なシステムを持っている。各器官の機能の出来ばえもなかなかのものだ。体内の血管の長さを合計すれば、なんと10万キロメートル。地球を2周半する長さである。米国の天文学者カー・セーガンによれば、人間の脳には、世界最大の図書館の蔵書数に匹敵する「2000万冊の本に相当する情報」が詰まっているそうである。

そのような身体と脳の不思議なパワーとメカニズムは、生まれたときには、すでに組み込まれている。それらは、何万年何億年という長い年月をかけてつくられたものである。というのは、地球上に生命が生まれてから人類が誕生するまでの35億年にも及ぶ、まるで「綱渡りのような進化のプロセス」と、誕生

以来紆余曲折の過程を経て現在をつくりあげてきた「歴史のプロセス」との賜物であるからだ。それゆえ、人が持っている「生きていく力」は、各々に等しく与えられたものと言えるのだ。

ところで、初期設定が必要なのは、「自分には力がない」と決め込んでいる人たちに限定されるものではない。目標や課題をもって、あるいは充実感を持ちながら日々の生活を送っている人にとっても同じく必要なのである。というのも、ここでいう初期設定とは、「人間とは何か」といった、最も基本的なところを認識することであるからだ。そして、そうした初期設定によって、自分が存在していることのごさを確認できれば、価値判断のスケールが広がり、生きていることの素晴らしさを実感できるからだ。

前述のように、ファースト・ステップとなる初期設定とは、「人は皆、『豊かな能力』生きていく力』を等しく持っている」という事実を認識することに集約される。ただ、初期設定さえすれば物事が完結するというわけでもない。潜在的にインプットされている力を十分に発揮するためには、次のステップが必要になる。そこで、大学教育との関連において、

「生きていく力」の中で最も基本となる力を抽出し、それらを鍛えることについて考えてみたい。

2 セカンド・ステップ〈基礎力を鍛える〉

「生きていく力」は、個人が生まれたときにはすでに潜在的には備わっている。しかし、それらはまだ、社会人として十分に活躍できるレベルとは言えない。

例えば、最も基礎的な力とも言える「聞くこえる」「話せる」「見える」といった能力の原型は、基本的には生まれたときにすでに準備されているが、そのままの状態では、まだ社会で十分には機能しない。そうした力を「聞く力」「話す力」「書く力」「読む力」に鍛え上げていくことが必要になる。それらを鍛えるトレーニング自体はとてもシンプルなのだが、ただひとつ大事な点がある。「鍛えようという意志」である。それなしでは、十分にパワーアップできないのだ。

主体性を確立させるためにはさまざまな方法があると思うが、漠然と主体性を高めようといっても、学生は戸惑ってしまう。主体性を高めるためには、まずはコミュニケーション力をはじめ、理解力や行動力の向上につながる基礎的な四つの力を鍛えるこ

とが肝要であり、それらを鍛えるには、何をどのようにすればよいのかを示した上でトレーニングを行うべきなのである。

「聞く」と「読む」は「相手の情報を受けとる」と。鍛えるには集中力が大切だ。「聞く力」を鍛えるには、「聞くこうと思つて聞くこと」と「メモをする」とを習慣にすることが肝要である。

それに対して、「話す」「書く」は「相手に情報を発信すること」なので、分かりやすく伝えることが重要な要素となる。思いついたままダラダラと話をして、相手に理解されにくい。ところが、ポイントを整理して話をしたり、文章にまとめたりするだけで、うまく伝わるようになる。

大学時代を充実させるセカンド・ステップは、「聞く」「話す」「書く」「読む」といった基礎的な力を鍛えようという意志を持ち、それを実践することである。指導する教員も、「聞く力」「話す力」「書く力」「読む力」といったそれぞれに四つくらいずつのレベルを設定する。レベルごとにクリアすべきポイントを具体的に明示し、それがクリアされているかどうかをチェックする。学生一人一人に現時点のレベル

を指摘し、レベルアップのために注意すべき点をアドバイスする。教員によるそうしたサポートがあれば、学生の基礎力は目に見える形で高められていくだろう。

基礎的な力を鍛える場は、けっして教室や勉強部屋だけに限らない。課外活動、アルバイト、趣味やスポーツなど、日常的なさまざまな生活の場面で実践できる。例えば、「今日の練習では、①と②の点を鍛えよう」「後輩に言いたいことは、①と②だ」「このゼミを志望した理由は、①と②です」といったように、あらゆる場面でポイント整理を活用する。そうすれば、課題を仕分けしたり、軸を作って物事を考えたりする習慣が養われていく。それに優先順位を付けると、「仕事力」の育成という形でまさに自身自身の将来につながっていくのである。

3 サード・ステップへ生き方をデザインする

学生が自分の能力に気付き、基礎力を育成したとしよう。しかし、依然として大きな迷いがあるのではないだろうか。いったいどのようなにしてこれからの人生を歩んでいけばよいのかという問題である。

しかし、あまり難しく考える必要はないというのが私のスタンスだ。人生設計には、二つの方法しかないからだ。一つは「これまでやってきたことをさらに伸ばしていく」こと。もう一つは、「将来やりたいことを明確にし、それを実現させるために何をやるべきかを考える」ことである。

いずれの方法でも、突き詰めていくと、自分はこの人間だということを理解することができる。それを促す一つの方法として、私自身が「過去・現在・未来シート」と名付けたものがある。

まず、A3判くらいの大きな紙に三つの枠を書く。枠の上に過去・現在・未来と書き、それぞれの枠の中に「やってきたこと」「やっていること」「将来やりたいこと」を書いていく。学業に関するものだけでなく、習い事、趣味・特技、部活、スポーツ、リーダーシップ、ボランティア、アルバイト、海外経験など、番号を付けてなんでも書き込んでいく。各々の項目に、例えば「何年間続けたのか」「これまで行ったことを数値化するとどうか」「どのような大会に出場したのか」「成績はどうだったのか」「どのような壁にぶつかったのか、挫折を味わったのか」

「そのとき、どのように克服したのか」「どのような工夫を凝らしたのか」といった説明を加える。同じ項目があれば、「過去↓現在↓未来」もしくは「現在↑未来」というように線で結んでいく。過去・現在・未来というつながりを確認するためである。

このシートに基づいて、これまで多くの学生にキャリア指導を行ってきた。シートを見るたびに驚かされるのは、学生が経験してきたことの幅の広さと奥深さである。そして、この作業を通じて確信したのは、誰もがほかの人との差別化を図ることができる自己PRの素材を持っているという事実と、どのような活動からでも自らの能力の向上と自信の獲得を図っていけるということである。

就職活動で最も重要な点は、「私ってこういう人間です」という軸の設定であると言われている。そのような自己認識をしないままだと、いくら就活のスキルのみを高めても、壁にぶつかってしまう可能性がある。サード・ステップは、自分自身のライフデザインのための軸を作ることにほかならない。履歴書やエントリーシートを書く前に、そうしたシートを作成して自己認識と自己分析をすることを学生に

助言してみてもどうか。自己PRの素材や「キャリアフリーズ」の発見にもつながると思う。

おわりに

これら三つのステップを踏めば、学生は自分の大学生生活を充実させ、未来への懸け橋となる道が開かれると述べてきた。だが、学生だけではなく、教員の中にも、学力のみで能力を測ってしまう傾向があることもまた事実である。しかしながら、ここで指摘したように、そのような考え方では冒頭に示したある種の壁を乗り越えにくいのではないだろうか。

教員をはじめとする大学構成員にいま望まれていることは、第一に「学生が皆、等しく持っている豊かな能力Ⅱ生きていく力」という考え方を軸にした能力観、第二に、学業のみならず、日常的な多様な活動の中でも基礎力を育成できるという発想、第三に、学生が経験してきた多種多様な活動を過去・現在・未来というつながりのなかでデザインすることを通じて、「生きていく力」のパワーアップを図れるという考え方を軸にした大学教育への取り組みではないだろうか。